

カンボジアをみて

東京学芸大学附属国際中等教育学校 5 年（高校 2 年）

Mako M.

はじめに

ツアー全体を通してのキーワードは”格差”である。水道水は直接飲めず、ホテルのテレビをつけても画面に線が入ったり、雑音が入ったりするなど、日本にいる時と同じような生活はできなかった。加えて、都市部から農村部に移動するにつれ、街並みが一変し、まるでタイムスリップしたかのような感覚だった。このように、国際社会の中での発展途上国という「グローバル規模の格差」と「国内での格差」という二重構造で格差問題を抱えているということがツアー中の至る場面で伝わってきた。

このニュースレターでは、「教育」と「技術革新と歴史の伝承」の二軸で経験したことをお話しできたらと思う。また、それぞれの経験に個人的に関連すると感じた文学作品も載せてみたので、ぜひ見てみてほしい。

参加動機：

中学 2 年生の頃から通っている子ども食堂では、貧困は経済的貧困だけではないと感じさせられることが多くあった。色々な貧困があり、逆に言えば、豊さにも色々な種類がある。お金による一方的な力で強い国が弱い国を支援・支配するのではなく、その色々な豊さを豊さとして認め、互いに持っている貧困を補い合えるような権力が均衡している共生関係を築いていけるような相互関係を築きたいという思いがあり、このツアーに応募した。

教育

トゥール・スレン博物館、キリングフィールド（チュンエク）（教育格差原因編）：

トゥール・スレン博物館（ポル・ポト政権時代に捕まった知識人の人々が拷問された場所）を音声ガイドを聞きながら見学し、キリングフィールド（拷問された後、彼らが殺された場所）をガイドさんに案内してもらいながら見学したのだが、ポル・ポトの原始共産主義的な考えのもと、教師を含む多くの知識人が嘘の供述を強いられ、殺されたという事実には衝撃を受けた。拷問所では鎖で人々が繋がれ、殴る蹴るなどは当たり前、排泄物を容器から漏らすと舐めさせられたり、蠍を用いた体罰、生きたままの解剖、気を失うまで採血させられたりしたことを知った。その影響が大きく、現在のカンボジアでの教育水準は低いことを身をも

って感じた。

やはり、見学中は恐怖心を抱く瞬間もあった。しかし、ここで拷問され殺された無実の人々が一番怖かったはずであり、それを私たちが学ぶということはただその恐ろしさを教えて終わりではないはずだ。この暗黒時代が現在の教育格差にどのような影響を与え、それを改善するために、私たちは何ができるのか。この答えを見つけるために学ぶ歴史であると思えたことで、ただ怯えるだけではない、一歩踏み込んだ視点で見学することができた。

★関連作品

ジョージ・オーエル『1984』

→ディストピア小説で、ビッグブラザーという権力組織によって、人々の思想や生き方が支配される世界。組織の考えに反する者は、思考犯罪者として、拷問され、嘘の供述まで求められ、最後には殺される。ポール・ポト政権について学び、ある正義により、多くの無実の人間が犠牲者となる世界で、正しさとはどう扱われるべきなのかが共通した問いとして浮かんだ。

チュブトラウ寺子屋：



子どもが、「子ども以上の心配をしなくて良いような世界になってほしい」、「学びたいというその意志を守れる社会を築きたい」と心から感じられる経験であった。「勉強が大好き」、だから家の手伝いをしながらも、いつスクールが降るかわからない状況でありながらも、華奢な体に似合わない

自転車を漕ぎながらガタガタな道を片道1時間以上かけて寺子屋に通う子がいる。日本ユネスコ協会連盟が行う世界寺子屋運動では、文房具が買えない、働かなければいけない、お金が足りないなどさまざまな理由で学校からドロップアウトしてしまった子どもが通える学びの場（寺子屋）を提供している。訪問した寺子屋で外からでも聞こえる子ども達の音読する、その生きている声に、学べることの奇跡を感じた。子どもたちはとても懐っこく、一緒に折紙で手裏剣や風船を作ったり、外でカンボジアのゲームをしたりしながら、まるで、日本で友達と遊ぶかのような感覚で、時間が一瞬にして過ぎていった。この子達の中に家族の家計を支えるために働き、家事を担っている子がたくさんいることが信じがたかった。しかし、そんな状況にある子どもたちの生活を無理やり変えることなく、暗くなる前に家に帰れるような下校時間の設定など、寄り添いながら可能な限り学びを提供している寺子屋だからこそ、この子達は学べているのだということを実感した。

★関連作品

宮沢賢治『よだかの星』

→ツアーに同行してくださった高木先生（富山ユネスコ協会会長）に紹介していただいた童話。見窄らしい見た目のよだか。美しい外見の兄弟におとる自分やまわりの生き物に罵られ、最後には、星になることを望み、今もまだもえつづける星となる。寺子屋で一所懸命に学ぶ子たちの居場所が守り続けられるように、自分が劣っていると思わないような環境を守り続けたいと感じた。

大人の識字クラス：

また、夜に訪れた大人のための識字クラスでは、男性も数名いたものの、主に子ども連れ的女性が多かった。きっと家事がひと段落した頃に留守番するには幼すぎる子どもを連れて学びに来ているのだろう。先生が黒板に貼った文章を読める生徒が前へ出て一文ずつ音読し、それを他の生徒が復唱するという流れだった。子どももいる大人が文字を学んでいるという言葉の響きは異様に感じられたが、その光景はとても純粋で真っ直ぐであった。子どもの時に学べなくても諦めない向上心と学ぶことを諦めさせない環境に出会い、自分はなぜ学んでいるのかを改めて考えさせられる機会となった。



技術革新と歴史の伝承

UNESCO プノンペン事務所：

職員の方が、カンボジアでは AI についての扱い方や情報リテラシーに関する情報が十分ではないとおしゃっていた。そのため、ショート動画などを通して、情報源を確認することなどの必要性を訴えかけているという。日本でも AI の使い方についてはまだまだ試行錯誤の段階である。特に学生として、教育現場では課題などにおいて、生成 AI の不正利用などが大きな問題となっていることを日々感じている。新たな技術とどのように共生していくのかという課題は、発展途上国としての課題の先にある技術革新に関するものでありながら、グローバル社会の中では避けられないものであり、前述のような二重構造での格差を生む原因となっているのではないかと考える。

また、民主主義の国でありながら、カンボジアではジャーナリストの安全が確保されてお

らず、情報の多様性に乏しいということを学んだ。特に女性が少なく、政府の意向に反する意見を持つものは排除されることもあるという。情報を受け取るものが情報の選択をするためには、そもそも多様な情報が得られることが前提として挙げられる。選択の自由があって初めて、その吟味の仕方についての話ができる。個人の持つ意見が権力により支配されることなく、民主主義的な情報選択の自由が確保されていくべきだと感じた。

★関連作品

カズオ・イシグロ『クララとお日さま』

→説明していただいた UNESCO プノンペン事務所の職員の方も言及されていた一冊。AF という人工知能の友達を持つことが主流な世界で、病気の女の子がクララという AF と紡いでいく物語。AI などの技術革新が進む中で人間はどう付き合っていくべきなのかを考えさせられる。

トゥール・スレン博物館、キリングフィールド（チュンエク）（歴史保全・伝承編）：

日本ではナチスのホロコーストに関する授業は中学生の歴史から学び、ある程度充実しているものの、ポル・ポト時代についてはあまり学ばない。悲惨さは比較すべきものではないかもしれないが、ポル・ポト時代の悲惨さはホロコーストなどの出来事に匹敵するものであった。技術革新により、情報が溢れる中で自分が何を知っているのか、自分が得る情報はどのようにして選択されているのかを考えさせられ、いかに自分の持っている知識をメタ認知できるかが重要であると感じた。

また、今回は実際に拷問されていた場所や殺された場所に行き、歴史を学んだ。今後、上述のような情報社会で、暗い歴史を受け伝えていくためにも、どのように歴史を伝えるのかを吟味していく必要があると感じた。もちろん、学校の授業を受けることや、インターネットに落ちている資料を読むことも重要である。しかし、手頃に情報が手に入れられる社会で自分の五感を通して学ぶ歴史にはどのような意義があるのだろうか。また、様々なソースから情報収集することどのような意義があるのだろうか。きっとそれは歴史を登場人物が一人の物語で終わらせないことなのだと思う。歴史はノンフィクションで、そこにはさまざまな立場の人がいたということを知ることが、同じ過ちを繰り返さない、平和な世界に近づくために求められていることなのだと感じた。

アンコール・ワット：

日本の神社などでは見ることのない石材から造られている寺院、アンコール・ワット。凄まじい暑さの中での見学だったが、その美しさにはやはり感動した。そして、日本をはじめ世界各国からアンコールワット修繕のため、人材が派遣されていることを知った。見学中に最も印象的だったのは「世界遺産は世界のものであり、世界の人が守り、伝承していく責任がある。」という言葉である。地球に存在するものを地球人が守っていくこ



とで歴史は忘れられずに守られていくのだと感じた。この世界で歴史を守るのはある限られた人でも国でもない、みんなにその責任があり、それを知って受け継ぐ必要があるのだ。

おわりに

教育格差という点では、その原因と取り組みについて学んだ。特に寺子屋や大人の識字クラスへの視察を通して、学ぶことの純粋な楽しさを生で感じ、自分はなぜ学ぶのかを考えさせられた。そして、そのような環境普及の必要性を強く感じた。

技術革新と歴史の伝承という点では、技術革新についていくことが要求される中でリスクを管理し、そのような情報社会で歴史を受け継いでいかなければならないという逆方向に同時に進まなければいけない状況にあるということを学んだ。しかし、これはカンボジアだけではない。日本にいても他のどの国にいても同じである。

以上の二軸を中心にたくさんのことを学んだ一週間であった。はじめに述べたように、その学びの中には、“格差”はたくさんあった。だが、もう一つ付け足しておきたい。それは、カンボジアの方々の人生の豊さが決して乏しいというわけではなかったことだ。ホテルの受付の方、マーケットで会う方、ガイドの方々、訪問先の方々、カンボジアで会ったす方々は笑顔で、心優しい人ばかりだった。“格差”は比較しやすい一部の事柄で、もちろんそれは、それは解決されなければいけないものである。しかし、それ以上に素晴らしい豊かさがあることに気づかせてくれた一週間であった。

謝辞：

最後に、今回のスタディツアーに同行して下さった皆様、現地を案内して下さったガイドさん、そしてこのツアーの計画から実現まで支えて下さったすべての御関係者様に感謝申し上げます。今回の経験により学ばせていただいたことを、社会に還元していけるよう邁進してまいります。